

## 大鶴庵塊翁撰絵入俳書『名家画譜艸名集』について

The study on the book “Meika-gafu So-mei-syu” compiled by Daikakuan Kaio  
with lots of haiku and botanical illustration

金子明代

KANEKO Akiyo

The book “Meika-gafu So-mei-syu” is a haiku book published in Nagoya in the late Edo period. That was compiled and published by Daikakuan Kaio, whose profession was to evaluate haiku. That contained haiku and illustrations about the seasonal flowers. The painters who drew the illustrations represented many kinds of flowers beautifully and characteristically. In this paper, I aim to clarify how they had been involved with Kaio.

江戸時代後期に名古屋で出版された『艸名集』は、古今の諸家の俳諧と草花の挿画を載せた多色刷りの挿絵入俳書である。四周単辺無界の匡郭の中に句題となる草花にちなむ複数の句とその作者の名、四季の草花を大きく配す。画面の縦横に葉や蔓、花びらを咲き伸ばす草花の図と、その周りに連なる句との共演が美しい。秋之部、夏之部、春冬之部の各一冊、全三巻からなる。

内題や柱題はなく、柱には秋、夏、春冬の巻名の頭文字である「ア」「ナ」「ハ」「フ」の表記と丁数のみを記す。『国書総目録』の統一書名は『艸名集』で、角書に「名家画譜」とあり、『草の名集』の別書名があるとする<sup>1</sup>。国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベースだけでも20件のコレクションがヒットするほか、大学などの研究機関や全国の図書館に複数の現存本が登録されている<sup>2</sup>。さらに、個人蔵となっているものもある。それぞれの登録書名は、題簽や刊記などから採られている。その成立は文政5（1822）年から同10（1827）年とされ、その30年ほど後の安政4（1857）年の奥付を持つ後刷本も確認されている。

撰者の竹内塊翁（1764～1829）は、尾張知多郡の生まれで、初号を竹有、別号を大鶴庵とし、加藤暁台（1732～1792）が没した後、井上士朗（1742～1812）に俳諧を学び、名古屋市桑名町で点業に従事した俳人である<sup>3</sup>。序文の中で「大鶴うし」や「大鶴庵のあるし」の呼称で登場する。秋之部の序文は大蘇（？～1822）、夏之部は邀明室五道（？～？）、春冬之部は松林鳳臺（？～？）が担当している。それぞれ秋や夏、春冬の草花の名を織り交ぜながら『艸名集』が編まれたことを寿ぐ内容を贈っている<sup>4</sup>。

各句に「芭蕉」や「暁台」、「士朗」など詠み手の名が付されているのに対し、草花の図には人物を特定する署名や落款がない。複数の手が想像される図の筆者については、梅逸や月樵、墨僊ら名

古屋周辺で活躍した複数の画師らの名を具体的に提示する言及と、筑前秋月藩の御用画師斎藤秋圃(1768～1859)の関与を指摘する言及の2種類がある。前者では画師らの名を断定的に記載するものの、典拠となった板本の情報が明記されていない<sup>5</sup>。また、後者は、斎藤秋圃の画業を理解するための作品探索から考察が進められており、『艸名集』に計8句を採首されている「秋甫」なる人物の解釈が問題となる<sup>6</sup>。一方で、これらの筆者は図の様式的な検討から言及されたものではなく、図との関係は曖昧なままに放置されてきたといえる。

拙稿では、複数の後刷本を持つ『艸名集』の出版の経緯を改めて整理し、初刷に近い板に含まれる「目録」及び「筆者目録」(以下、「筆者目録」)を頼りに一部の図の筆者の検討を行う。それにより、文政期の尾張の画壇が俳壇とどのように交わり創作を行っていたのか、その一端を『艸名集』より明らかにすることを目指す。

## 2. 出版経緯と「筆者目録」について

『艸名集』には複数の後刷本が存在する。「筆者目録」について確認するため、出版の経緯について整理する。『艸名集』を撰すに至った経緯や『艸名集』という書名の由来は特に秋之部の大蘇の序に詳しい。「漢詩や和歌にも歌われず木の陰などで一生を終える草やそうでありながらも実をこぼし根を地中に残して翌年の秋にも色や香りを周囲に伝える草が俳諧の機縁にならないか」と、塊翁が四季の草花にちなむ古今の俳諧を集めて編纂したのが『艸名集』であり、大蘇が塊翁に請い「草の名集」という書名を名付けたことを明かしている<sup>7</sup>。その『艸名集』の奥付などの内容は、大きく3つに分類される<sup>8</sup>。「大鶴菴藏」の記載を持つ菱屋久兵衛を板元とするものと、美濃屋文次郎を「賣捌処」とするもの、美濃屋伊六を板元とするものの3つである。

国立国会図書館が所蔵する『艸名集』のうち「名古屋本町九丁目菱屋久兵衛」を板元とする三冊(以下、国会本)の秋之部刊記には「目録(略)／文政五稔壬午秋刻成／大鶴菴藏／艸之名集秋之部終」(「／」は加筆。改行を示す。以下、略。)、夏之部序には「文政六のとし 未新春」、刊記には「筆者目録(略)／癸未夏 大雀菴塊翁撰」、春冬之部刊記には「目録(略)／文政十丁亥刻成／大鶴菴藏／艸之名集春冬之部 終／(略)」とあり、三巻が文政5(1822)年、同6(1823)年、同10(1827)年と時間をあけて刊行されたこと、その全巻が塊翁自身を板木の所有者とした私家版であったこと、さらに各巻に担当図とその筆者に関する記載があったことが確認される【図1、2】。

この国会本秋之部の刊記と符合する内容を持ちかつ『艸名集』の成立に最も近い刊記と推測されるのが、漆山又四郎氏の『絵本年表 三』が紹介する『艸名集』秋之部である<sup>9</sup>。同書の文政5年の条にみる「名家画譜艸名集秋之部」の項目には「俳句草花 半紙本彩色入 一冊／玉琴・孔南・玉鳳・菊泉・大鶴・女子亘公／大路・松臺・弓影・翠岳・秋圃・玉僊／墨僊・月樵 序大蘇／文政五稔壬午秋刻成 大鶴菴藏／○ 卷末廣告二艸名集春之部夏之部冬之部近刻トアリ／尾張 名古屋 書林 菱屋久兵衛」とあり、文政6(1823)年の序を持つ夏之部が発行される前に刊行された秋之部の奥付などを書きとったものと分かる。国会本は、巻末広告「尾張書肆玉山房製本目録」に夏之部や春冬之部の予告は含まず、また発行書林に「東都日本橋中通 六左衛門」の名もあり、漆山氏が採取した板本の後刷本と思わ

れる。他に菱屋久兵衛を板元とする大鶴菴藏版である東京国立博物館所蔵本三冊の序及び奥付の一部を小林法子氏が紹介するほか<sup>10</sup>、東京大学洒竹文庫やカリフォルニア大学ロサンゼルス校日本古典籍目録が所蔵するものが菱屋久兵衛を板元とすることが確認される<sup>11</sup>。

この後、美濃屋文次郎と美濃屋伊六の名を記載した奥付を持つ『艸名集』が刊行される。この奥付には、刊行年や菱屋久兵衛の名、大鶴菴藏、「筆者目録」などの情報はないようである。「各邦書籍賣捌処／名古屋本町六丁目／美濃屋伊六／同十一丁目／美濃屋文次郎」とのみあり、ともに名古屋本町に軒を並べる本屋から販売されたことが記されている。江戸時代後期の奥付には、売りさばきだけを担当した本屋の一覧が記載されることがあったといい、この記載もその類の可能性もある<sup>12</sup>。春冬之部が発行された文政10（1827）年以降に刷られた後刷本となる。

さらに安政4（1857）年の新たな奥付を持つ板本の出版が美濃屋伊六を板元として行われた<sup>13</sup>。奥付には「諸名家發句画帖／艸名集春冬之部全一冊／全夏之部全一冊／全秋之部全一冊／安政四年丁巳三月／尾陽書林／名古屋本町三丁目／菱屋藤兵衛／同京町通小牧町／美濃屋伊六」とあり、春冬之部、夏之部、秋之部と四季の巡りに合わせて巻号を入れ替え三巻同時発売としたことが確認される。この奥付を持つ板本の中にも美濃屋伊六の住所を「同」の一字のみとするものがあり<sup>14</sup>、複数の後刷本が作成されたと推測される。

このうち、早稲田大学附属図書館所蔵の複数の『艸名集』のうち〔中〕島氏図書の印記を持つ雲英末雄氏旧蔵の三冊（以下、早稲田大学本）夏之部には「筆者目録」が加えられている<sup>15</sup>。菱屋久兵衛を板元とした大鶴菴藏版の「筆者目録」と同じ板であり、美濃屋文次郎を「賣捌処」とした板本には含まれていなかったものである。少なくとも夏之部の「筆者目録」の板木はこの後刷本の刷りの時点まで残っていたものと思われる。また岸雅裕氏は、明治5（1872）年に中央官庁が改正発布した出版条例に関連して名古屋縣が調査した報告書と推測される同年2月の『名古屋縣管内板箇所取調書』の写本に名古屋縣管内の書林の蔵板書計525種が掲載されており、そのうち「小牧町書林／美濃屋伊六藏板」の中に「草名集 著述者不詳／同 三本」とあることを紹介しており、少なくとも明治5（1872）年の時点まで『艸名集』三冊の板木を美濃屋伊六が所有していたことが確認される<sup>16</sup>。

成立当初に近い大鶴菴藏版には、後刷本では曖昧になっていくいくつかの情報が含まれることが確認される。このうち「筆者目録」の内容の真偽が図の筆者の解明において大きな問題となる。しかしながら、例えば夏之部41丁ウの「オモタカ」の文字と「筆者目録」の「オモタカ」の「タカ」の文字とは傾斜の角度や筆の払いや止めの長さなど筆跡の点で不審な点はないと思われ、以下この情報を基に検討を行う。

### 3. 絵師と図について

『艸名集』には、秋之部に98図、夏之部に78図、春冬之部に59図の総計235種の草花が描かれる<sup>17</sup>。図は句題に対応して登場し、多数に上る図は多色刷や墨一色で表したものの、緻密に描き込まれたもの、極めて単純化されたものまで様々あるが、前提条件としてそれぞれにそのものらしく

そこに在るといふ命題を負っていたといえる。表は、句題として掲げられた草花の名称とその異名、さらに大鶴菴藏版の各巻の「筆者目録」が明記するところの図を担当した筆者の名を記載したものである【表1】。なお、「筆者目録」に記載された草花のうち一部に本文中の草花と同定できなかったものがあり、その筆者は省いてある。

これらによると、玉琴、孔南、玉鳳、菊泉、大鶴（大雀）、女子亘公、大路、松臺、弓影、翠岳、秋圃、玉僊、墨僊（墨仙）、月樵、臥雪、梅逸、イセ東籬、芝石、雪潭、日光山下普記、葵園、秀眞、水谷氏、黄花、仙果、墨樵、花溪、少年貞吉の計28名の名が筆者として挙がる。夏之部41丁ウのウキクサとオモタカの筆者が葵園と玉鳳とされるように【図2】、半丁の中で2名の筆者の図が混在したことを示唆する記述もあり、図の検討に注意が必要となる。注目すべきは、名古屋周辺で活躍していた複数の絵師の名が流派を越えて登場することである。

このうちの張月樵（1772～1832）は、近江彦根職人町の出で京で呉春（1752～1811）に学んだ後の寛政年間（1789～1801）中に名古屋へ移り、尾張藩の御用画師となった人物である<sup>18</sup>。秋之部の2図と夏之部の序書、春冬之部の2図を担当したと記載される。秋之部や春冬之部の「目録」にはみられない「序書」とは、おそらく五道が寄せた序文を月樵が代筆したという意味で、大蘇や鳳臺が自筆の序を寄せたことと区別される<sup>19</sup>。序文の筆跡と月樵の筆跡との検討には名古屋市博物館蔵月樵筆《関羽張飛図》などが参考になる可能性があるものの、情報が少なく、検証に至らなかった。しかしながら、図の筆者を列記する中であえて異なる情報を組み込んだのは、担当図は少ないながら秋之部と春冬之部の最後の丁に月樵図が登場すること、さらにそれらは一つの句題に複数の句を掲載することが多い本書において一句一図で表されることとともに、月樵への特別な配慮である可能性がある。

春冬之部30丁ウの冬牡丹の図は、寛政10（1798）年の序を持ち暮雨巷臥央が編じ月樵が画を担当した俳書『続姑射文庫』第4巻35丁ウと36丁オの見開きの「白牡丹」の図と極めて似通っている【図3, 4】。輪郭のみで表した白い花卉と黒一色で示した蕊や葉の形態、白い筋で表した葉脈の表現は同種の感覚を示しており、あたかも同一の牡丹が蕾から開花したものへと変じたかのようである。『続姑射文庫』は、暁台を中心とした暮雨巷と称する一派が編じ東甫に画を描かせた明和5（1768）年刊行の『姑射文庫』の続編にあたる。『続姑射文庫』において月樵は一句に対し一図を添えており、月樵が担当した『艸名集』の最終の仙人掌草と冬牡丹の丁はこの形式を強く引いていると思われる。また、文化14（1817）年に刊行された月樵の『不形画藪』の花木にみる写生的な表現とも異なっており、それ以前に成立した『続姑射文庫』の表現に意図的に近づけたものと思われる。

月樵は、名古屋に来る以前より名古屋の俳人と間接的に交流を持っていた。蕪村（1716～1783）の安永末期の作と推測される漁夫の図に暁台が加賛したものを中心として、天命期の複数の俳人や歌人、文人、画家が加筆して大幅となった享和3（1803）年の柿衛文庫蔵《蕪村ほか諸名家合作図》の中にも月樵の画が含まれており<sup>20</sup>、蕪村の弟子であった呉春（月溪）に学んだ月樵は蕪村と親交のあった暁台のテリトリーの周辺にあったといえる。そのことは『続姑射文庫』の担当絵師の選定や、蕉風俳諧の復興に努めた暁台とその高弟であった士朗、その弟子である自身の系譜を



強く意識していたものと思われる塊翁に影響を与えた可能性は大きい。

冬牡丹図以外の、秋之部 36 丁ウの仙人掌草の図なども簡潔ながら生き生きとした生命力と立体感が表現されている。以上の点から、「筆者目録」が記載するところの月樵の図は月樵が担当したとして相違ないと思われる。また、寺島徹氏は、白鷗の序、塊翁の跋を持つ文政期の点帖（題簽「しのゝめ」、半紙本）の最後に執事の識語として景品についての覚え書きがあり、「亀堂、土精の二子は遠いため、重い景品をおくることができず、「月樵画扇」などを引き替えて贈る旨が書き留められ」ていることを紹介されており<sup>21</sup>、文政期に月樵と塊翁の間に交流があったことの一つの証左となる。このことは、『艸名集』の「筆者目録」全体の信憑性を高めるものである。

牧墨僊（1775～1824）は尾張藩士で、江戸で喜多川歌麿に入門した後、名を墨僊と改め、葛飾北斎の門人となった絵師である。文化 11（1814）年に尾陽書林永楽屋東四郎から初編が刊行された『北斎漫画』の版下絵は同 9 年に北斎が名古屋に半年間滞在した際に逗留した墨僊宅で描かれたことが初編の半洲散人の序文に記されており、同じく初編の奥付には「尾陽名古屋 校 門人 北亭墨僊」と記されている<sup>22</sup>。「筆者目録」によると、秋之部 12 図、夏之部 4 図、春冬之部 1 図の計 17 図を担当している。巻によって担当図の数に偏りがあるのは墨僊が同 7 年に没したためと思われる、『艸名集』の図が時間をかけて徐々に集められたことを示唆している。

秋之部 29 丁ウの豆類の図は、螺旋状にきつく巻かれた蔓先の表現が『北斎漫画』三編 28 丁オの浅瓜や瓢箪の蔓先とよく似通っている【図 5, 6】。天命期に活躍した狂歌師の狂歌に歌麿が虫と植物の図を寄せた『画本虫撰』の蟻螂の図にみる豆の丸々とした実やその実を包む皮、そこに生える産毛などの描写が自然で過剰なところがないのに対し、『艸名集』の豆類の図はより明快かつ装飾的であり北斎の影響下の図と思われる。

服部直子氏は、墨僊が文化 9（1812）年頃に塊翁に入門したか、もしくは、絵師として招かれた可能性を指摘している<sup>23</sup>。中でも、同 10 年を中心に塊翁らの句を所載した俳書を多数自費出版していた名古屋枇杷島の豪商梅樹軒加藤逸人（1774～1829）の俳書『四季三番叟』の塊翁の句に添えた「かみなり」の挿絵や、神谷浩氏が紹介する名古屋市博物館収蔵の牧家伝来資料 129 点のうち墨僊の挿絵に塊翁らの句を添えた同 9 年の《行灯図》や《白象図》、門人に配布した塊翁自画の摺物が墨僊の手許に残ったと推測される同 14 年の《二童子掲額図》は、この頃墨僊と塊翁の交流が一気に高まったことを示している<sup>24</sup>。

梅逸とされる図は夏之部に 2 図、春冬之部に 1 図ある。名古屋の天道町の彫刻師の父のもとに生まれた山本梅逸（1783～1856）は、月樵に師事したのち、神谷天遊（1710～1801）の下で中林竹洞（1778～1853）とともに明・清画を学び、安政元（1855）年に京より帰郷し、名古屋藩御絵師格に取り立てられたという<sup>25</sup>。輪郭線を用いない付立て技法で描かれている点が梅逸の花鳥図の画風を想起させる。特に春冬之部 12 丁オの堇の図は、葉の形態や根の髭まで草花の特徴を詳細かつ的確に描き出しており、文政元（1818）年の《墨花図巻》にみる蒲公英の厳格な描写と通ずるところがある【図 7】。20 歳代前半まで使用した春園の号で梅図を寄せた《松竹梅鶴図并寄書》には士朗らも句を寄せており<sup>26</sup>、梅逸もまた早くより名古屋俳壇と関わっていたことをうかがわせる。

また、拙稿では人物の確認に至らなかったものの<sup>27</sup>、秋之部 34 図、夏之部 19 図、春冬之部 6 図を担当したとされる大路の図は、図によって表現や内容の密度に差があるものの草花の特徴を極めて正確に写した図が含まれる点が興味深い。夏之部 32 丁オの時計草の図は、その複雑な姿態の特徴をよく捉えた図である【図 8、9】<sup>28</sup>。長針、短針、秒針のように 3 つに分裂した蕊やその下の 5 つに分かれる蕊、花芽を付けて伸びる蔓や巻ひげなど繊細かつ丹念な描写を持つ。一部、5 枚ずつの花弁とガクの部分と葉との境界に錯綜があり両者の黄色と緑色が混ざり合うように表されているものの<sup>29</sup>、2 列に並ぶ多数の糸状の副花冠や葉の色分けなど、少ない色数で高い再現性を示している。同 21 丁オの蓴菜（ジュンサイ）と水菘房（ミルフサ）の図もまた、蓴菜の楕円形楕形の葉や水松の二股に分岐しながら伸びる円柱状の枝など、その特徴を詳細に描き出すとともに、一葉ごとに向きを変える葉や分岐する幹の複雑な重なりなどが自然で、客観的な目で植物の形状を正確に写し取るうとした痕跡が認められる【図 10】。

特徴をよく理解できていないと描くことができなかつたであろうこれらの図の淵源には、特徴を正しく明確に伝える何等かの絵図資料があったと思われる。これらの図は、恣意的なものを一切排除して草花の特徴を極めて忠実に淡々と再現しようとする一方、眼前の草花を写生した生々しい像とは異なる特有の硬さが感じられる。例えば時計草の 5 葉に手を広げたような形の葉やガクの合わせが中央に合わせられた蕾など形や角度が画一的で、像を写し取る者が理解できる範囲の情報を取捨選択し単純化した結果であろう。

その淵源は本草書の類と思われる。大路が担当した夏之部 8 丁オの真蓼の図は、柳に似た披針形の葉のみならず水中から引き抜いた根をも描く図である<sup>30</sup>。同じく水生植物である蓴菜の本来水の下に隠れている葉より下の部分や真蓼の土中に埋まっている部分すら全てを暴き出そうとする態度は、これらの図を採択した書の目的が単なる鑑賞体験を越えた博物学的な色彩を帯びていたことと関係するであろう<sup>31</sup>。春冬之部の松林鳳臺の序には、『艸名集』の図が草花の形状を詳しく描写し、絵空事ではなく「物学びの手つき」で描いている点を称賛する内容があり<sup>32</sup>、この「物学び」が示す正確なところは判然としないものの、本書の本草書的な性格を指す可能性がある。

その他、森玉僊（高雅）（1791～1864）や澤井翠岳など月樵や梅逸とともに書画会引札などにも現れる絵師や<sup>33</sup>、旭亭玉鳳、水谷菊泉、高橋仙果、安藤玉琴、舎人葵園（1780～1848）ら玉僊らに連なる絵師<sup>34</sup>が含まれる。さらに塊翁ら絵を専門的に学んでいない俳人が筆者として登場する。玉琴が担当したとされる秋之部 3 丁ウの影を切り抜いたように平面的な蘭の図は明らかに中国画学書『芥子園画伝』の「蘭譜」を引くものである【図 11】<sup>35</sup>。同じく玉琴の秋之部 10 丁オの芋の図や玉鳳の秋之部 20 丁ウの稗と高麗黍の図は、『北斎漫画』三編の 27 丁ウの芋や蜀黍の図を参照したものである【図 12～15】。『艸名集』の草花の図は、一つの構想の下集積された様々な様式や表現の図が混在するところに特徴がある。繰るごとに異なる表情をみせるそれらは、文政期の名古屋画壇の様相と、彼らと俳壇との深い関係性について切り取っているといえる。

なお、18 図を担当したとされる「秋圃」が文化 2（1805）年に大阪から筑前へ移り秋月藩のお抱え絵師となった斎藤秋圃であるかという問題については、限られた時間の中で斎藤秋圃画の確認

に至らなかった。ただし、尾張地方の俳人を相撲の番付に見立てた《細評俳諧名録》の柱内に「秋甫」の名がみえ<sup>36</sup>、また文政4(1821)年4月の「名古屋大雀菴塊翁評」の点帖(豊橋市中央図書館所蔵)に添削を受けた「秋甫」の句が含まれているとの指摘があり<sup>37</sup>、『俳諧人名辞典』にその名は確認されないものの<sup>38</sup>、尾張地方周辺に「秋甫」なる俳号を使用した人物がいた可能性もある。

#### 4. 『艸名集』の広がり

『艸名集』の本文第1頁目となる秋之部3丁オの牽午子(アサアオ)の項には、「薺(シュン)ヲ牽午子(アサカホ)トヨムハアヤマリ也。薺ハ木ナリ。本草ノ注ニモミエタリ」との記述がある。本文中「本草」の語が記載されるのはここだけであるものの、『艸名集』は文字情報の作成についても本草書を参考にしたことを示唆している。同16丁ウの弟切草の項目にみる「鷹の病を癒す妙薬となる草の秘密を弟が他人に漏らしてしまったことに腹を立てた兄が弟を殺した」ことを名の由来とする話と似通った説話が正徳2(1712)年に寺内良安が刊行した百科事典『和漢三才図会』に見いだせる<sup>39</sup>。同27丁ウの菊の項目にはその菊花にまつわる風俗や風習、行為などから派生した語が載せられており、本草書などと照らしながらあてたと思われる記述が本書を性格づける大きな要素となっている。

塊翁の私家版である『艸名集』の出版を板元として補助したと考えられる菱屋久兵衛の活動は、寛政6(1794)年に尾州藩への開版の勅願が許可され尾州の書林仲間を形成される以前の、宝暦年間(1751～1764)から確認されるという<sup>40</sup>。文化元(1794)年刊行の葛飾北斎筆『伝神開手北斎画鏡』や、文政元(1818)年刊行の「東都画工 葛飾北斎筆、尾陽名古屋 門人 月光亭墨仙 戴環 北鷹 月齋哥政」校合の『北斎画鏡』、東海道木曾街道を紀行した士朗の発句集などを出版しており、北斎や墨僊、名古屋俳壇と深い交流のある本屋であったといえる。

また、奥付に彫工の名は刻まれていないものの、秋之部の11枚の板木の匡郭外に「新吾鐫」の文字が彫られており、彫師が自身の名を刻んだものと思われる【表1】。時代は下るが尾張の植物学者伊藤圭介(1803～1901)が彫師に対し板木の一部の「ほりかへ」を細やかに指示する文久2(1862)年の書翰が思い出される<sup>41</sup>。一部の板木だけに名が刻まれているのは、それらへの自負の可能性がある。例えば、墨僊の豆類の図は、巻ひげや棘など細く近接した線を的確に表し、点線や白抜きした豆の膨らみなど巧みな技術をみせる【図5】。同じく墨僊による30丁ウの芭蕉の図では、一転勢いのある筆の筆致を生かした描写を正確に再現している。新吾の名は『名古屋市史』や『愛知県史』に見出すことはできないものの<sup>42</sup>、『艸名集』は多くの人たちの手を寄せ集めるようにして塊翁が時間をかけながら撰じたものであるといえる。半丁の中に複数の絵師の図が混在する点も、時間をかけて図を集め句を合わせた所以であろう。

『艸名集』は、その性格ゆえに、成立後も意義を拡大し続けた不思議な魅力を持つ書であった。草花の句題を詠んだ古今の俳諧の図鑑であっただけでなく、句題とその異名、特徴的な草花図の図鑑でもあった。蕪村が極限まで高めた俳諧と画の境目が一致する俳画の情趣性に満ちた世界観から距離を取り、草花のよりリアリティを持った図とそれに因んだ複数の句との全体で以って草花の句題と



しての可能性を提示する書であったといえる。美濃屋伊六が刊行した歌川豊国筆『豊国年玉筆』の巻末出版目録には、『三體画譜』や『英筆百画』など7種の画譜とともに『艸名集』三冊が紹介されており<sup>43</sup>、「名家画譜」としての一面に重きを置いた販売が試みられたことを示唆している。

また、膨大な江戸時代の絵本を整理して『絵本年表』などを著した国文学者で漢学者、書誌学者であった漆山又四郎氏（1873～1948）は、自身の蔵書をまとめた『漆山天童蔵書目録』で自身が所蔵する『艸名集』三冊を「隨筆索引」内の「本草 博物 雑」の分類項目に配しており、俳書である以上に本草学的な視点から本書に興味を抱いていたことを示している<sup>44</sup>。実際に、昭和7(1932)年に『艸名集』の草花を五十音順に並べ替えた『艸名集索引』（早稲田大学附属図書館所蔵）を著し、谷素外編、北尾重政画で草花図と俳諧を組み合わせた安永10(1781)年刊行の『俳諧名知折』や『實用植物図説』などの草木と比較検討している<sup>45</sup>。それは、塊翁が春冬之部の刊記の最後に添えた「草の名に埋もれたる種をいさゝかこゝに植つ」<sup>46</sup>という目的以上に柔軟な性質を『艸名集』が持っていたために起こった解釈の拡大と思われる。

## 5. おわりに

江戸時代後期に名古屋で生まれた『艸名集』の出版経緯を改めて整理し、初刷に近い大鶴庵蔵版にみる「筆者目録」を頼りにごく一部の図と筆者との検討を試みた。その結果、『艸名集』には、文政期の名古屋の画壇の中心にいた複数の絵師が流派を越えて関わっていた可能性があり、特に月樵画は『続姑射文庫』に連なるものとして重視されたものと思われる。またそこには、本草書に由来するような図の採取も行われていたものと推測される。残された図と筆者の検討が今後の課題であるものの、『艸名集』は、文政期の塊翁を中心とする尾張俳壇の周辺で活躍した絵師たちを検討材料になり得る史料であり、また絵師たちの基準作を提示する可能性のあるものとの結論を得た。

## 註

- <sup>1</sup> 岩波書店編『国書総目録 補訂版』第5巻 岩波書店 1990年 288頁
- <sup>2</sup> 国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース  
(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/app/l/#%2Fsl%2Fsi%2F7B%22keyword%22:%22E8%89%B8%E5%90%8D%E9%9B%86%22,%22sortField%22:%22o.regsrt%22,%22sortOrder%22:%22asc%22,%22sz%22:20,%22fr%22:0%7D>) (2020年1月23日現在)
- <sup>3</sup> 高木蒼梧『俳諧人名辞典』巖南堂書店 1982年 507頁
- <sup>4</sup> 各巻の序に関する翻刻や内容把握については、愛知県立大学稀書の会の伊藤伸江氏(同大日本文化学部国語国文学科教授)と狩野一三氏(名古屋デンタル衛生士学院非常勤講師)、加藤希氏(同大大学院国際文化研究科前期課程2年)にご教授いただいた。また、それらを基に意見交換を行った。以下の序の引用は、三氏の翻刻による。
- <sup>5</sup> 前掲註3書、漆山又四郎著『絵本年表 三 自文化至天保』(『日本書誌学体系 34(3)』)青裳堂書店 1983年 234頁
- <sup>6</sup> 小林法子氏は、斎藤秋圃の略年表の中で『艸名集』に「秋甫」の句が含まれること、さらに東京国立博物館所蔵本秋之部奥付の「目録」の「秋圃」の項目に19種の草花の名があることを指摘されている(同氏「筑前関係絵師史料—斎藤秋圃略年譜—」『福岡大学人文論叢』25(1)、福岡大学研究推進部、1993年、419、420、434、435頁)。また、中野三敏氏は、「秋甫」が詠んだ計8句の句題の図を斎藤秋圃が担当した可能性を指摘されている(同氏監修「福岡大学図書館HP「和本の美」」(<http://www.lib.fukuoka-u.ac.jp/e-library/tenji/wabi/wabi-html/syu/wabi-h08.html#08-x>)) (2019年11月4日現在)。なお、この8句の句題と「目録」の「秋圃」担当の草花は一致していない。対して、高杉志緒氏は、秋圃が挿絵を寄せたと想定される8種の板本(うち7種が私家版の俳書)と異なり『艸名集』のみが名古屋の俳壇・板元であること、さらに挿絵や奥付に秋圃の落款・記載がないことから秋圃挿絵に加えることには疑義が残るとされる(同氏「斎藤秋圃の挿絵本について」実践女子大学文芸資料研究所編『絵入本ワークショップXI 資料集「日本文学と挿絵リテラシー」』実践女子大学文芸資料研究所 2018年 29頁(本資料については、愛知県立大学教授伊藤伸江氏よりご教授いただいた。))。
- <sup>7</sup> 塊翁が俳諧の機縁にと草花に目を向けた経緯については、特に秋之部1丁オの「木ノのかけ敷のはしくれにひとり／さひしうさき終るなどはいと／本意なけなりされともそれか／ほとほとにみをこほしねをのこ／してまたくる秋もおのか時氣／にいろ香をくはるはいと／しうあ／はれなり」の部分にその気持ちが表れている。また書名の由来については、同2丁オの「その草稿を見／るにうれしくこひて集名をつ／けむといふにゆるされたればまた／はちらひて発端はいて侍らす／鸚鵡のものいふかと草の名集／とそくちまねす」の部分に明かされている。そのすぐ後には、「朝顔はあるがままの姿こそが最も好ましい」と詠う「あさかほはたゝあさかほそのものしき」の句が添えられている。これらは、伊藤氏、狩野氏、加藤氏のご教授による。
- <sup>8</sup> 原本にあたったのは名古屋市鶴舞中央図書館所蔵本、愛知県図書館所蔵本、H氏個人蔵本(秋之部と春冬之部のみ)、国立国会図書館が所蔵する2組のうちの1組の一部で、公開データベースにて全頁を確認したのは早稲田大学附属図書館所蔵本(<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/search.php?cndbn=%E8%89%B8%E5%90%8D%E9%9B%86&szlmt=30>) (2020年1月24日現在)と国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベースから愛知教育大学附属図書館所蔵本(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100072465/viewer/1>) (2020年1月24日現在)である。また、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベース([https://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta\\_pub/CsvSearch.cgi](https://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi)) (2020年1月24日現在)と新日本古典籍総合データベース、国立国会図書館の国立国会図書館サーチ([https://iss.ndl.go.jp/books?ar=4e1f&any=%E8%89%B8%E5%90%8D%E9%9B%86&op\\_id=1](https://iss.ndl.go.jp/books?ar=4e1f&any=%E8%89%B8%E5%90%8D%E9%9B%86&op_id=1)) (2020年1月24日現在)から各機関が所蔵する『艸名集』の書誌情報を参照した。
- <sup>9</sup> 前掲註5 漆山書。同書は、同氏の『日本木版挿絵年代順目録』四冊と『同 音順目録』二冊の自筆稿本の影印版を納めたものである。
- <sup>10</sup> 前掲註6 小林論文。
- <sup>11</sup> 前掲註8のデータベース等参照。
- <sup>12</sup> 橋口侯之介『和本入門』(『平凡社ライブラリー 千年生きる書物の世界』744)平凡社 2011年 180頁
- <sup>13</sup> 橋口氏によると、奥付の人名・書店名が並んでいる場合、末行に代表者を書く習慣があるという(同前、188頁)。拙稿でもこれに従った。
- <sup>14</sup> H氏個人蔵本秋之部にあり。
- <sup>15</sup> この早稲田大学本は、夏之部に「筆者目録」が含まれるのに対し、秋之部27丁と春冬之部30丁に落丁が確認される。
- <sup>16</sup> 岸雅裕『尾張の書林と出版』(『日本書誌学体系 82』)青裳堂書店 1999年 220～224頁。著述者不詳後の「同」は二書前の『讀書正誤』の「安政四年官許」を示す。また、同氏は、成立事情等は不明ながら明治3(1870)年の記録とされる『名古屋書林蔵板目録』を紹介している(同書、396～398頁)。この「小牧丁／美濃屋伊六」の項目には「同断／一艸名集 三巻／尾張諸俳人画」とあり、「同断」は「官許・安政四巳年名古屋菱屋久兵衛方求板」を指すことから、安政4年に菱屋久兵衛から美濃屋伊六へ板木の権利が移動した可能性がある。

- <sup>17</sup> 「筆者目録」が記載する草花の数を数えたもの。ただし、記載する植物が本文と同定できなかったものは外した。外したもののリストは【表 1】備考の通り。
- <sup>18</sup> 名古屋市役所編纂『名古屋市史 学芸編』愛知県郷土資料刊行会 1979年 363、364頁、市古貞次編『国書人名辞典』岩波書店 1996年 277頁
- <sup>19</sup> 序文は文を寄せるだけでなく自筆で書いたものを贈るものであったが、諸家に頼んで書いてもらうことがあったという（前掲註 12書、114頁）。
- <sup>20</sup> 逸翁美術館、柿衛文庫編『没後 220年 蕪村』思文閣出版 2003年
- <sup>21</sup> 寺島徹「化政期における大鶴庵塊翁の月並句合について—江戸後期尾張俳壇の月並句合（三）—」『金城学院大学論集 人文科学編』第 15 卷第 2 号 金城学院大学 2019年 196頁
- <sup>22</sup> 神谷浩氏は、『北斎漫画』初編の序文に「(前略) ……今秋翁たまたま西遊して我府下に留まり、月光亭墨仙と一見相得て驩はなはだし。頃亭中に於て品物三百餘図を写す。仙佛士女より初て、鳥獸草木にいたるまで、そなはらさることなく、筆はふいて神なせり。……(中略) ……題する漫画を以てせるハ、翁のミつからいへるなり。文化壬辰陽月尾府下 半洲散人題」とあることを紹介される(同氏「北斎と名古屋—研究序章— 一牧墨偃収集版画画帖の紹介を中心に—」『名古屋博物館研究紀要』第 18 卷 名古屋博物館 1995年 1、2頁)。また、奥付については、新日本古典籍総合データベースが公開する静岡県立中央図書館所蔵本を参照した (<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100065855/viewer/31>) (2020年 1月 24日現在)。
- <sup>23</sup> 塊翁への入門については、文化 9 (1812) 年に刊行された巫仙編、大鶴庵塊翁表題、加藤逸人出資かと目される俳書『冬嶺松』(無刊記) に 2 句、翌年正月に刊行された大鶴庵塊翁・梅樹軒逸人編『桃櫻』(無刊記) に 1 句、墨偃の発句が入集していることをその根拠に挙げておられる(服部直子「牧墨偃の挿絵—俳書の世界」『浮世絵芸術』169号 国際浮世絵学会 2015年 57～59頁)。
- <sup>24</sup> 前掲註 22 論文 11、12、24 頁
- <sup>25</sup> 名古屋市役所編纂『名古屋市史 人物篇 1、2』愛知県郷土資料刊行会 1980年 385～387頁
- <sup>26</sup> 名古屋博物館編『南画家山本梅逸—華麗なる花鳥・山水の風雅—』(名古屋博物館、1998年) 参照。
- <sup>27</sup> 寺島氏は、岐阜県立図書館所蔵の白鷗序、塊翁跋の点帖(題簽「しのゝめ、半紙本」)の中に添削を受けた大路の句が収められていることを紹介している(前掲註 21 論文 195頁)。
- <sup>28</sup> 草花の名称や部位、性状などは新村出編『広辞苑 第 6 版』(岩波書店 2008年) を参照した。
- <sup>29</sup> 本来、蕊の向こうに描かれていた花卉とガク、さらにその奥に描かれていた葉の葉縁とが、複雑な形の蕊と重なり合い、彫の段階で図を正確に理解できなかったものと思われる。3時の方角の花弁とガクの奥に少しだけ覗く黄色の部分は、おそらくあたかも 10 枚の花弁であるかのようにみる時計草の本来 5 深裂する葉をガクに見立て辻褄を合わせようとしたものであろう。等間隔に並ぶ花弁やガクの特徴を一目で理解できたであろう絵師の手より後に生じた錯綜と思われる。
- <sup>30</sup> 秋之部「目録」によると「秋画」が担当した図の中に「蓼」の記載があるが、秋之部に「蓼」の句題や図はみられない。当初は秋にみられる薄桃色の蓼の花を句題として採用する計画であったか。
- <sup>31</sup> 宝永 6 (1709) 年に本編を、正徳 5 (1715) 年に付録と諸品図を刊行した貝原益軒の『大和本草』の巻 1 の総論では明の李時珍が諸本草書を集成・増補した『本草綱目』の分類について論じており、例として挙がる「蓼」や「水松」が古くより本草学の対象であったことが分かる(国立国会図書館編『描かれた動物・植物 —江戸時代の博物誌—』(国立国会図書館 2005年 24頁) 参照)。
- <sup>32</sup> 春冬之部 2丁オの「百くさ千種白露草形詳にわかまへ/画そらことの是節ならて天か下/の物学ひの手つきによられたるい/さをしいともいともめてたし」とある部分に、句を編纂したことだけでなくきちんと形状を描写した図の描き方についても称える言及がなされていることを、伊藤氏、狩野氏、加藤氏よりご教授いただいた。
- <sup>33</sup> 前掲註 26 書 参照。
- <sup>34</sup> 吉田俊英『尾張の絵画史研究』(清文堂 2008年 49頁) 参照。
- <sup>35</sup> 清代の康熙 18 (1679) 年に初集の山水樹石譜が、同 40 (1701) 年に 2 集の蘭竹梅菊譜と 3 集の草虫翎毛花卉譜が刊行された画学書で、元禄年間には日本に伝わっていたことが記録から確認される。和刻本が刊行されるなど広く流布し、江戸時代の絵画界の基本資料となった。特に池大雅ら文人画家の間で重視された(佐々木承平、佐々木正子『文人画の鑑賞基礎知識』至文堂 1998年 231頁)。
- <sup>36</sup> 名古屋博物館編『尾張の俳諧』名古屋博物館 2002年 71頁所載。柱の中央最上段には「塊翁」、大関に「名古屋 沙鷗」、前頭に「大曾根 五道」、「同(=ナコヤ) 鳳臺」など『艸名集』に句を掲載された俳人も複数登場する。
- <sup>37</sup> 前掲註 21 論文 195頁。
- <sup>38</sup> 前掲註 3 書
- <sup>39</sup> 新日本古典籍総合データベースが公開する国文学研究資料館所蔵本 (<https://kotenseki.nijl.ac.jp/app/1/#%2Fv%2Fsi%2F%7B>)

%22keyword%22:%22%E5%BC%9F%E5%88%87%E8%8D%89%22,%22sortField%22:%22o.regsorting%22,%22sortOrder%22:%22asc%22,%22sz%22:20,%22fr%22:%221%22,%22time%22:%2220200128045632%22,%22romajiCheck%22:%22%22%7D)  
(2020年1月24日現在) 参照。

<sup>40</sup> 前掲註16書 417頁

<sup>41</sup> 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編 20 学芸 近世6』愛知県 2012年 848、849頁

<sup>42</sup> 前掲註25書、同前。

<sup>43</sup> 前掲註16書 399頁

<sup>44</sup> 早稲田大学附属図書館古典籍総合データベース ([https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i04/i04\\_03159\\_a035/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i04/i04_03159_a035/index.html)) (2020年1月26日現在) 参照。

<sup>45</sup> 早稲田大学附属図書館古典籍総合データベース ([https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i04/i04\\_03159\\_a054/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i04/i04_03159_a054/index.html)) (2020年1月26日現在) 参照。

<sup>46</sup> 前掲註6小林論文 435頁

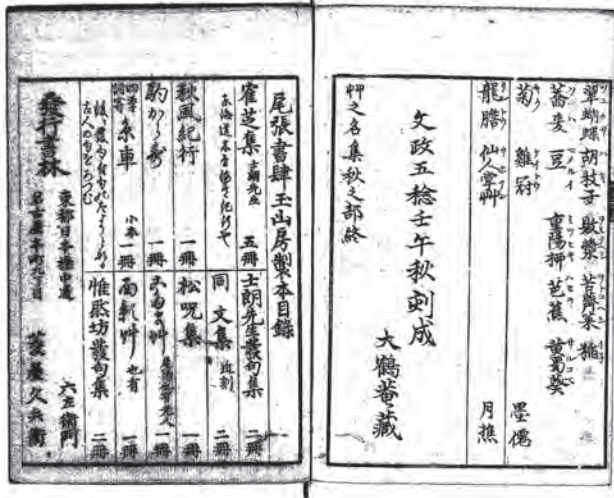


図 1



図 5

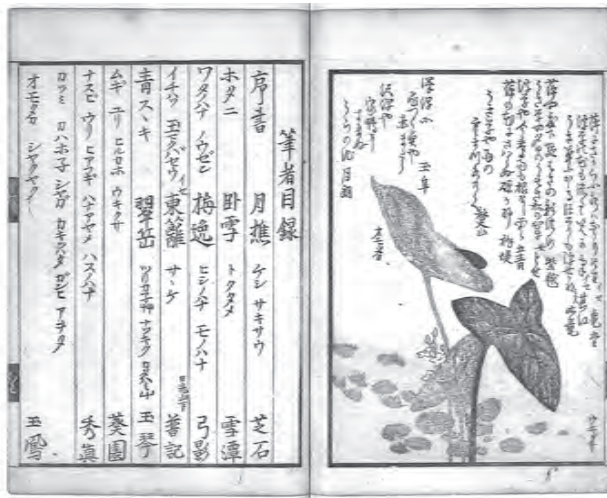


図 2



図 6

図 1 『艸名集』 秋之部「目録」 国立国会図書館

図 2 『艸名集』 ウキクサ、オモタカ、夏之部

「筆者目録」 国立国会図書館

図 3 『艸名集』 冬牡丹 個人蔵

図 4 『続姑射文庫』 牡丹 早稲田大学図書館

図 5 『艸名集』 豆類 個人蔵

図 6 『北斎漫画』 浅瓜



図 3



図 4

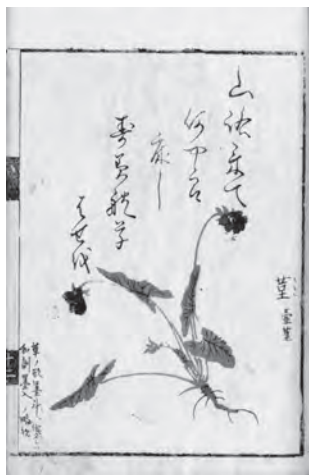


図 7



図 8



図 9



図 10



図 11



図 12



図 13



図 14



図 15

図 7 『艸名集』 董 個人蔵

図 8 『艸名集』 時計草  
名古屋市鶴舞中央図書館

図 9 『艸名集』 時計草  
名古屋市鶴舞中央図書館

図 10 『艸名集』 蓴菜、水菘房  
名古屋市鶴舞中央図書館

図 11 『艸名集』 蘭 個人蔵

図 12 『艸名集』 芋 個人蔵

図 13 『艸名集』 稗、高麗黍 個人蔵

図 14 『北斎漫画』 芋

図 15 『北斎漫画』 蜀黍